クールな御曹司の溺愛ペットになりました

あさの紅茶
Koucha Asano

Eternity
BUNKO

目次

クールな御曹司の溺愛ペットになりました　5

無意識の恋煩い　291

書き下ろし番外編
たとえどんな姿でも　307

クールな御曹司の
溺愛ペットになりました

プロローグ

猫がゴロゴロと喉を鳴らすのは、幸せを感じていたり飼い主になにか訴えたりしているから。

今の私はまさに猫。一成（いっせい）さんに飼われる猫だ。

「あっ、やっ……一成さ……ん、っく」

「嫌なのか？」

「……や、じゃない……、あっ、あんっ」

するりと差し込まれた手がつーっと肌を滑り、そして敏感な部分に触れる。

「あっ……」

すでにねっとりと濡れてしまった部分が恥ずかしくて、慌てて脚を閉じたけれど、いとも簡単にこじ開けられて身体がビクンと跳ねた。こじ開けられたのか、それとも誘導されて自分で開いたのか、もう思考はだいぶ遠くへいっている。

「もうこんなに濡らして。千咲（ちさき）は正直で可愛いな」

「あっ、言わないでっ……あっ」

優しく、けれど執拗に攻め立てられた秘部は、ビクビクと脈を打つ。

押し寄せてくる快感にふるふると身体を震わせ、一成さんのシャツを握りしめた。

「いっせ……いさん……、わたし……もう……」

息も絶え絶えに訴えたが、一成さんは「まだダメだ」と耳元で甘く囁く。

お預けにされて涙目になった私に、一成さんは柔らかな視線を向けた。

節ばって男らしいのに長く綺麗な指が、ワイシャツのボタンを手早く外す。一成さんの肌が徐々にあらわになっていく様は、目が離せないほどに美しい。普段シャツで見えないその部分は、想像よりもはるかに引き締まっていて、その身体のラインを眺めるだけで、心臓がバクンバクンと音を立てた。

「……かっこいいです、一成さん」

一成さんの身体を見るのは初めてじゃないのに、見る度にいつもそう思う。

とても綺麗で美しい。

男性をそんな風に思うのは変だろうか。

「千咲もとても綺麗だ。ずっと眺めていたい」

私を見下ろす一成さんは、とんでもなく艶っぽくて魅力的で、一成さんに抱かれる私はなんて幸せなのだろうと胸が熱くなる。

ほしい……一成さんがほしい。
「どうした？　そんな目で見て」
「ん……、一成さんの意地悪」
一成さんはくっと口角を上げる。
「どうしてほしい？」
囁きが、ゾクリと鼓膜を震わせる。
甘い言葉を発した唇は、身体のあらゆる部分にキスを落としていく。
びくびくと感じながら限界を迎えた私は、一成さんに目で訴えるけれど、彼は余裕の眼差しで私を眺めるだけ。触れそうで触れない微妙なラインを擦られ、「はぁ、んっ」と吐息が漏れた。
「ほら、ちゃんとおねだりして。なにをしてほしいんだ？」
一成さんは意地悪だ。わかってるくせに。絶対私に言わせようとする。抵抗してもじらされるばかりで、いつも私が先に根負けしてしまうのだけど。
一成さんの昂った熱いモノがあてられる。だけどそれ以上はしてくれなくて……
「……一成さんのが……ほしい……です。入れて……ください」
羞恥に耐えながら口にすれば「いい子だ」と甘いキスを一つ。
それが合図であるかのように、私の中をこじ開けて入ってくる硬くて熱い楔。深く

差し込まれたそれは、最奥を探るようにゆっくりと、けれどしっかりと貫いていく。
「んっ、くぅっ……」
「くっ、……好きだ、千咲」
「わ、私も。一成さん……んっ、くっ、ああっ」
痺れるような感覚に背が弓なりに反る。一成さんはそんな私を優しく抱きしめながら、呼吸を荒くした。
二人の熱い吐息が交じり合う。
この瞬間がいつも夢のよう。
いつまでも抱いていてほしい。
繋がっていたい。
ずっとずっと、あなたが好きだった。
私は一生この愛に溺れていたいの――

第一章　秘書として

寒い北風がだんだんと春の暖かい風に変わる頃。
親友の夏菜の家に遊びに来ていた私は、夏菜のお兄さんである一成さんに告白をした。
「私、一成さんが好きです」
もう、一生分の勇気を使ったと思う。握りしめた拳がプルプルと震える。きっと顔も真っ赤だ。
それに対して、一成さんがどんな顔をしていたのか、記憶にない。
ただ――
「千咲、ありがとう。俺も好きだよ。でも今は付き合えない」
一世一代の大勝負はなんともあっけなく、見事に玉砕。
クールな一成さんは、小さな微笑みとともに私の頭を撫で、そして何事もなかったかのように去って行った。
片山千咲、高校二年生、恋破れたり。
四月からは三年生で受験生。ああ、これで受験にも身が入るってものだ。なんて自分

を慰めてみたりして。
かたや塚本一成さんは、二十二歳の大学四年生。四月からは社会人になり、一人暮らしをするために実家を出て行くらしい。
そんな情報を夏菜から得て、私はほうっと胸を撫で下ろした。だって、失恋したのにその相手がいる家に遊びに行くのは気が引ける。いなくなってくれるのは、むしろ好都合といえよう。
ほっとした気持ちと残念な気持ちが、入り混じっている。
失恋したんだから、会えなくてよかったじゃないか。
そう思うのに……
まったく会えなくなって、心にぽっかり穴が空いた。
ふとした瞬間に、ぼんやりとしてしまう。一成さんは今、なにをしているのだろうと考えてしまう。
どうやら失恋の痛手は大きかったようだ。
ああ、これは夢だ、夢に違いない。現実を見たくなくて目を閉じる。寝て起きたら、まだ私は一成さんに告白していなくて、きっとなんでもない、いつもの日常が始まるの。
そうやって自分に言い聞かせていたけれど、次に目を覚ましたとき、そこは自分のベッドの上で、高校生ではないいつもの大人の私だった。

「はあ、またあの夢を見てしまった」
ため息とともに独り言ちる。
何度も夢に見てしまう。一成さんにフラれたあの日のこと。
どうせ見るなら、一成さんとデートしているところとか、そんな心躍るような夢にしてほしいのに。そんな夢は一切見ない。自分の脳みそに説教したい気分だ。
そんな鬱々とした気分のまま、枕元に置いていたスマホで時刻を確認する。と、メールが届いている通知に、ガバリと身を起こした。
ドキドキと緊張しながら、そのメールを開く。

＊＊＊

片山千咲様
先日はお忙しい中、弊社にお越しいただきまして、ありがとうございました。
さて、慎重に選考を重ねました結果、今回については採用を見送りとさせていただくこととなりました。
末筆ながら、片山様の今後のご活躍をお祈り申し上げます。

＊＊＊

「はぁー」
がっくりとして、スマホを布団の上に放り投げた。
もう何通目のお祈りメールだろう。何社受けたかなんて数えるのも飽きた。
この会社だって、こんなに丁寧なメールを送ってくるくせに、面接では酷いものだった。
『うーん、君ねぇ、うちの会社でなにができるのかなぁ？　これといって資格も持ってないみたいだし。秘書検定二級ねぇ。うちでは使えないよねぇ』
それに対してどう答えたか、覚えていない。
そんな風に批判するならば、書類選考の時点で落としてくれればよかったのに。なぜ面接に来いと言ったのか、そちらの理由を聞きたいものだ。そんなこと、面接官には言えなかったけど。
「はぁー」
何度目かもわからないため息を吐いて、枕に顔を埋める。これでもう、選考中の会社はなくなってしまった。働くためには、また求人情報を吟味して、エントリーをしなくてはいけない。
正直、まいってる。
就職が決まってないのは私だけなんじゃないかな。ていうか、就職できる気がしない。

ブブブ……

スマホが震え出し、枕に埋まったまま顔だけ横に向ける。行儀悪く相手先を確認すると、高校の時の同級生で唯一親友と呼べる相手、塚本夏菜からだった。

「もしもし？」

『千咲～、調子どう？』

「どうって？」

『就活のことよ』

「あ～……」

私と違ってハキハキと話す夏菜は、面接なんてお手のものといった感じで、早々に内定をもらった強者だ。もう四月から、社会人としてバリバリ働いている。

一方の私は、まったくと言っていいほど振るわず。もう五月も半ばだというのに、就職浪人として親のすねをかじって生きている。

『千咲の魅力がわからない企業なんて、働いても無駄よ』

「そうは言うけどさ、やっぱり面接が上手くいかないもの」

『誰だって面接は緊張するわよ』

「そうかもだけどさぁ……」

夏菜は明るい声で私を励ましてくれるけど、さすがにここまで決まらないと落ち込みも激しくなる。

書類選考は案外すんなり通っていくのに、面接で撃沈。とにもかくにも面接が苦手なのだ。

これについて自覚はありまくりである。悪い癖だとは思っているのだが、他人からの評価が気になりすぎるあまり、緊張していつも上手く話せない。故に、面接が上手くいかない。というのが自己分析結果だ。

「ねえ、夏菜のお父さんって、会社経営してるって言ってなかった？」

『うん？　してるよ』

「もー、そこで雇ってよぉ」

『あんたねぇ……』

「そういえば、夏菜は別の会社に就職したよね。お父さんの会社、手伝わなくていいの？」

私の問いを、夏菜は深いため息とともに一蹴した。

『嫌よ、なんで好き好んで家族と働かなくちゃいけないのよ』

「そういうもの？」

『そういうものよ！』

ふん、と鼻息荒くする夏菜だけど、いまだ内定ゼロの私には羨ましくて仕方ない。

ま、夏菜のお父さんの会社がどんな会社か、まったく知らないけれど。

『まあいいじゃない。親のすねをかじれるだけかじっておきなさいよ』

「ううっ。それももう時間の問題かも。かなり親からプレッシャーかけられてるよ。このままじゃニートになっちゃう」

泣き真似をする私を、夏菜はカラカラと笑い飛ばし、じゃあまた電話するわ～と陽気に会話は終了した。

夏菜と話したことでほんの少しだけやる気になった私は、また求人情報とにらめっこしたのだった。

その数日後のこと。

夏菜からの電話を受けた私は、意味がわからなくて目をぱちくりさせた。

「……は？」

『だから、うちの会社で働かない？』

「ちょ、ちょっと待って。うちの会社って、どこのことを言ってる？」

『うちの父が経営してる会社』

「えっ、ええ～！」

『この前、雇ってって言ってたじゃない』

「言ってたけど、まさかそんな本当に話がくるなんて……」

信じられない。だって冗談で言ったし（いや、半分本気だったけど）、夏菜だって呆れていたのに。

夏菜ったら、そっけないふりして聞いてくれたんだ……

なんて感動していると、「でも……」と歯切れの悪い答えが返ってくる。

『父の会社だけど、働くのはお兄の秘書としてね』

「お、お兄さん!?　秘書!?」

『そう、この話を持ってきたのはお兄だから』

とたんに、心臓がドッドッと悲鳴を上げた。

夏菜のお兄さんである一成さんには、高校生のときに告白して玉砕している。そんないわく付きの一成さんの元で働くだなんて。

『いやぁ、ダメ元で、千咲働かせてくれない？　って聞いたら、ちょうど秘書が辞めたばっかりで困ってるって言うからさぁ。千咲、秘書検定持ってたでしょ？』

「いや、うん、持ってるけど、でも二級だよ？」

『いいんじゃない？』

「い、いやいやいや……」

『そうよね、うちのお兄の下では働きたくないよね。それは非常によくわかる。あんな無愛想な奴、そうそういないもの』
「いや、そういう意味じゃなくてっ……」
『うん？』
「一成さんって管理職なの？」
『管理職？』
「だって、一成さんの秘書なんだよね？」
一成さんは私より五歳上だから、今は二十七歳だと思うんだけど、そんな歳で秘書を付けるって一体どんな仕事をしているのだろう。
ぐるぐると想像を巡らせていると、夏菜はあっけらかんと言った。
『お兄は副社長だよ』
「……意味わかんない」
私の呟きに、夏菜は『だよねー』と可笑しそうに同意した。その同意が、私と同じ気持ちだったとは、とうてい思えないけど。

◇

着慣れたリクルートスーツに袖を通し、派遣会社の営業担当に連れられてやってきた会社のビルを前にして、私は開いた口が塞がらないでいた。
「あ、あの、ここですか？」
「そうですよ。あれ？　事前に会社名をお伝えしましたよね？」
「は、はい」
都内一等地に堂々とそびえ立つ高層ビル。
ここが私の働く場所、株式会社塚本屋。
結局、就活に疲れきった私は、夏菜の紹介にありがたく頼らせてもらうことにした。
いや、正確には親に散々罵られたから……が一番の理由かもしれない。
『お姉ちゃんは立派に働いているのに、本当に情けない』
『大学も中途半端なレベルだもの、お姉ちゃんみたいにはいかないわよねぇ？』
『千咲はできないの？』
昔から、なんでも器用にこなす姉と比べられてきた。
――お姉ちゃんはできるのに。
――お姉ちゃんはすごい。
私も、姉のことはそれなりに尊敬している。本当にそつなくなんでもできてしまうし、私なんか足元にも及ばないことはわかっているのだ。

だけど、それを両親から責められるのはなんだか納得いかない。特別に虐げられているわけじゃないけど、両親の何気ない一言がグサグサと私の心を刺していく。

私だって本当は、お姉ちゃんみたいにそつなくなんでもこなしたいよ。そうやって生きていきたいと思っているけど、どうしても上手くいかないのだ。

私はブンブンと頭を振る。

今はそんなことを考えている場合ではない。これから副社長、一成さんの元へ行くのだから。

平常心、平常心……

仕事内容は一成さんの秘書だけれど、正社員ではなく派遣会社を通しての登録型派遣社員。派遣登録の際に面談があったけど、一成さんの秘書として働くことは決定事項のようで、呆気に取られる私をよそにとんとん拍子に契約が進んだ。それはもう、あれだけ面接で落ちたのが嘘であるかのようにだ。

確かに契約書には、『会社名：株式会社塚本屋』と書いてあった。

夏菜の名字は『塚本』だから、なるほど、家族経営の会社なのね、一成さんが副社長なのも納得だわ、なんて思っていたわけだけど。

目の前にそびえ立つ高層ビルを前に足がすくむ。

ビルの前には「定礎」と刻まれた銘石とともに、会社名『株式会社塚本屋』の名とロゴが記されている。

「塚本屋って、あの塚本屋ですか？」

このロゴは見たことがあるのだ。テレビのCMでもよく見かける。創業は江戸時代、日本茶の老舗で、京都や静岡の名店と張り合うほどの超有名な会社。

「ええ、あの塚本屋です。大企業でお仕事できるのも、派遣の強みですよね」

営業担当は自信満々とばかりに胸を張る。

「あ、はは、そうですね……」

頭をハンマーで殴られたかのような衝撃を受けた私は、乾いた相槌しか打てなかった。

今思えば、そう、今思えばだけど、夏菜の家は高級住宅街の一軒家で、しかも結構大きくて、お金持ちっぽい感じはしていた。

お父さんが会社経営しているとしか聞いていなかったけど、まさかこんな大企業だなんて思わなかった。

「夏菜……それならそう言ってよ……」

実は彼女は、バリバリの社長令嬢だったのかと、どうでもいいことをぼんやりと考えていた。

◇

塚本屋のビルは、一階にお茶屋、二階にカフェスペース、そして三階以上がオフィスビルとなっている。なんでも、塚本屋の事務部門がここに集約されているのだとか。

受付で入室許可証を受け取り、営業担当とはここで別れる。

「では片山さん、お仕事頑張ってくださいね。副社長の秘書はすぐに辞めちゃう人が多くて困っていたんですよ。片山さんには期待していますよ」

「えっ⁉」

さらりと怖いことを言い残し、営業担当は笑顔で去って行った。

すぐに辞めちゃう……って？

心に引っ掛かりを残し、不安な状態のまま副社長室へ足を踏み入れた私は、彼の姿にあっと息を呑んだ。

さらりと流れる髪は清潔感があり、それでいてどこか繊細さを感じさせる。すっと伸びた鼻すじに薄い唇。そして、意志の強そうな焦げ茶色の瞳。濃紺のスーツを着こなし、長い手足が際立つよう。

一成さんに会うのは何年ぶりだろう。

私が記憶していた一成さんの何倍も大人の魅力がたっぷりで、とたんに鼓動が速くなる。

「あ、あの、今日からここで働かせてもらうことになりました。片山千咲です。よろしくお願いします」

まるでぎこちない挨拶に、自分でも動揺する。

一成さんに会うことが、こんなにも緊張するだなんて。

「久しぶりだな」

低く、胸に響くような優しい声音。

一成さんはほんの少しだけ目元を緩ませ、ソファに座るように促した。

「し、失礼しま……きゃっ！」

あまりの緊張につま先が絨毯に引っ掛かり、想定外にバランスを崩してしまった。前のめりになった私の腕を絡め取って、一成さんが慌てて体勢を立て直してくれる。

「大丈夫か？」

「す、すみません」

と、顔を上げた瞬間、一成さんとの距離があまりにも近くて一気に体温が上昇した。

かっこ良すぎて心臓が痛い。無理、やばい、この距離はやばい。

私は顔を真っ赤にしながら、ズササッと距離を取る。

「もっ、申し訳ありませんっ」

とんだ失態だ。初っ端からなにをしているんだ、私は。

バクンバクンと、心臓が壊れそうなほど音を立てる。と同時に、鼻の奥がツンとしてきた。

ああ、本当に、自分が嫌になる。こんなことでいちいち動揺してしまうなんて。

高校生のときに一成さんにフラれて、何年もかけてその想いを断ち切ったと思っていたのに。たったこれだけのことで、ときめきが舞い戻ってくるなんて、我ながら単純すぎる。

落ち着け私、落ち着け私。

私は一成さんにフラれた身なのよ。ていうか、これは仕事なんだから。

などと心の中で葛藤を繰り返していると、クックッと小さく笑う気配がして、少しだけ顔を上げる。

「本当に、相変わらずだな千咲は。初めて会ったときのことを思い出すよ。あのときも顔を真っ赤にしていたな」

ぐっ。

過去を思い出さないでほしい。

初めて会ったときは緊張したのと、一成さんのあまりのかっこ良さにドキドキしていたのだ。

今もなお、大人の魅力にあてられているけれど。

「仕事を探していたんだって、妹から聞いたよ。ちょうど猫の手も借りたいところだったんだ」

「あの、私なんかで良かったのでしょうか」

いや、本当に。フッた相手を雇うとか、どういう神経してるの。

……フラれた相手の元に、のこのこ働きに来た私も大概だけど。

それに一成さんは副社長。そんな偉い人の秘書なんて、私なんかで務まるかどうかも不安なのに、一成さんに恥をかかせないかも心配で仕方がない。

「千咲がいいからオファーした。なにか問題でも？」

「い、いえ……」

そんな風に言われると悪い気はしない。むしろ良いように捉えてしまって、落ち着かなくなる。

「それに……」

「……？」

言い淀んで、一成さんは困ったようにほんの少しだけ眉尻を下げた。

「俺の秘書は、俺が嫌になってすぐに辞める。俺に原因がある……とは思っているが、

いまだに改善できない」

一成さんを嫌になる？　そんなことあるの？

「だから千咲には、長く働いてもらいたいと思っているのだが……」

「えっと、はい、頑張ります」

せっかくもらったご縁だもの。頑張って働かなくちゃ。

深々と下げた私の頭に、一成さんはポンポンと優しく手を置いた。たったそれだけのことなのに、触れられた部分が熱を持つかのようにぽわんと温かくなった。

秘書の仕事は、副社長である一成さんのスケジュール管理から始まる。ほかにも、電話やメール、来客対応や情報管理、そして環境整備などといった業務内容があり、まずは社長の秘書を務める、時東茜（ときとうあかね）さんが私の教育係となった。

時東さんは二十七歳。新卒で塚本屋に就職したエリート社員だ。グレーのパンツスーツがよく似合う美人さん。くっきりとした目元が印象的で、けれど決して派手ではなく知的な印象を与える。

「先に言っておくけど、副社長に恋心は抱かないこと」

「こ、恋ですか……？」

ドキッと肩が震える。なにか見透かされているのかと緊張が走ったが、どうやらそうではなさそうだ。

「そう、ここだけの話、罪な男なのよ、副社長は。秘書になった子を毎回泣かせてダメにする」

「泣かせる？」

「あの容姿とスペックの良さで、女子はみんな恋焦がれるんだけどね、反面仕事に厳しいし、視線だけで人を殺しにかかるから、間違って告白した日にはくだらないって一蹴されて泣きを見るの」

「う、うわぁ……」

と言いつつ、視線で人を殺しにかかるって……想像もつかない。まあ確かに見た目は不愛想で冷たい印象はあるけど、笑わないわけではないし、昔も今もそんな怖い思いはしたことがないからだ。

「片山さんはここが初めての就職先だって聞いたわ。大変なこともあると思うけど、一緒に頑張りましょうね」

「はい、お願いします」

時東さんは優しく微笑んでくれ、私はほっと胸を撫で下ろした。

面接と同じように、初対面の人と話すことは緊張するけれど、こうしてフレンドリーに接してもらえると、私も落ち着いて受け答えができる。とてもありがたいことだ。

「今日は十時から来客があるから、まずは準備をしましょう」
時東さんに言われるがまま、仕事に取り掛かる。
いきなり来客とかハードルが高い……なんて思ったけれど、それよりも会議室の準備や呈茶（ていちゃ）の確認など覚えることが多すぎて、時東さんについていくだけで精一杯。受付までお迎えに上がるのも、会議室までご案内するのも、時東さんの丁寧でスマートな所作に、ただただ感服するばかり。
安っぽいリクルートスーツを着た私は、その差をまざまざと見せつけられたのだった。
これは一成さんの殺しにかかる視線よりも、時東さんのキャリアウーマンな仕事ぶりに心がやられそうな気がする。
初日から時東さんにバリバリ仕事を教えられ頭がパンパンの私は、定時を告げるチャイムとともに大きく息を吐いた。
ぐったりしている私とは対照的に、時東さんは一日働いてもしゃんとしている。化粧崩れもないし姿勢だって綺麗。このまま明日を迎えても平気そう。すごいな……と感心していると、ふとあることに気付いた。
私、明日からスーツどうしよう。
今日は初日だから無難なリクルートスーツを選んだのだけれど、よく考えたら明日からはこれではいけないのではないだろうか。時東さんのように洗練されたおしゃれスーツじゃないと場違いに見えてしまうかもしれない。
……一枚も持ってませんけど？

「どうかしたか？」
ふと声をかけられて視線を上げる。こちらにも、朝となんら変わらない凛とした姿の一成さんが、不思議そうな顔をして私を見ていた。
「いえ、あの……服装って、時東さんみたいなスーツを着たらいいでしょうか」
「服装？　別にこだわらないが？」
「いや、こだわりとかではなく……」
「特に規定はないから、人前に出て恥ずかしくない格好ならなんでもいい」
だからそれが難しいんだってば。いっそのこと制服でもあればいいのに。私の葛藤をよそに、一成さんはふっと微笑む。
「千咲は可愛いから、なんでも似合うよ」
「ぐっ……！」
思わず耳を疑った。
さらりとすごいことを言われた気がする。動揺する私とは対照的に、一成さんはまったくもって気にしていない様子。涼しい顔をしている。
可愛いだなんて言われ慣れてない。そう、慣れていないから、過剰に反応してしまっ

ただけよ。はー、落ち着け私。

考えれば考えるほど動揺が顔に出そうになって、慌てて顔を伏せた。

なのに、一成さんは私の頭を優しく撫でて、「お疲れ様」と一言残して副社長室へ入っていった。

おかしい……

一成さんってあんな人だったっけ？　もっとクールでツンツンしていた気が……夏菜なんて「お兄は冷徹無慈悲」なんて言っちゃうくらいだし。あ、いや、でも会えば優しく話しかけてくれるし、笑ってくれてもいたけど。でもやっぱり冷たい印象はあったわけで……

今の一成さんからは、そんなの微塵も感じられない。

私はそっと頭に触れる。撫でられた部分が熱をもって、しばらく顔を上げることができなかった。

「夏菜ぁ、買い物付き合って」

仕事帰りの夏菜を捕まえて、私は早々に文句を言った。

「ねえ、夏菜の家、塚本屋だなんて聞いてないんですけど。まさかそんなお嬢様だなんて知らなかったよ」

「まあ、言ってなかったからねぇ」

「そうならそうって言ってよ。今日出勤して本当にびっくりしたんだから。お父さんが社長でお兄さんが副社長って、もうすごすぎでしょ！」

「そうかな？」

「そうだよ！　まさか大企業で働けるなんて思ってもみなかった」

「でもお兄の部下なんて絶対嫌じゃん。冷徹無慈悲にこき使われるだけよ」

「ちょっとちょっと、それを紹介したのは夏菜じゃないの……」

吐き捨てるように言う夏菜に、思わず苦笑いだ。少なくとも、今のところまったく冷徹無慈悲にこき使われてはいない。

「一成さん、優しいよ」

「ほう。じゃあその優しいエピソードを聞こうではないか」

夏菜は疑いの眼差しで私を見る。

そうだなぁと、今日あったことを思い返してみると、唐突に躓(つまず)いて転びそうになった私を支えてくれたり、可愛いって言ってくれたり、頭を撫でてくれたり……

あれ？

一成さんが優しいっていうか、私の恥ずかしいエピソードばかりなんですけど。

思い出して徐々に顔が赤くなる私に、夏菜は冷ややかな視線とともに「ほら、ない

じゃん」と勝ち誇った顔をした。
冷徹無慈悲なのは夏菜の方なんじゃないかと疑いたくなったけど、口に出すと怒られそうなので心の中にとどめておく。
「ま、でも、千咲はお兄のお気に入りだし、悪いようにはしないんじゃない？」
「……は？」
お気に入り？
はて？
「千咲は小動物みたいで可愛いって、昔言ってた」
「小動物……」
「うちで飼ってるハムスターに似てる」
「ペットじゃん」
「あはは、ほんとだ。案外、餌付けされてたりして」
「されてません！」
もう意味がわからない。
一成さんが私を小動物みたいで可愛いだなんて、思うわけないじゃん。
だって私は一成さんにフラれているんだから。
……まあ、そのことを夏菜は知らない。

いくら親友でも、これだけは秘密にしている。私の黒歴史。
そんなくだらない話をしながら、目的であるスーツを何枚か選ぶ。鏡の前で合わせてみるけれど、どうにもしっくりこなくて徐々に気分が落ち込んできた。
よく考えたら、私は背も低くて胸もぺったんこ。特別スタイルがいいわけでもないし、顔だってどちらかというと童顔タイプ。私がおしゃれスーツなんて着ても、背伸びした子供みたいになる。
そんな私が、一成さんの秘書でいいの？
時東さんみたいに美しいプロポーションの美人さんは、なにを着ても似合うだろうけど。
「いらっしゃいませ。スーツをお探しですか？」
突然に声を掛けられ、私はびくっと肩を震わせた。
「あ、えっと……」
「スーツというか、この子に、働くオフィスレディ的な似合うもの、ありますか？」
尻込みした私に代わり、夏菜が積極的に店員さんと会話を始める。こういうのも本当に苦手。夏菜はなんでも器用にこなしてしまうけど、私は上手く言葉が出てこない。もはやコミュ障かも……なんてうっすら思ったりもする。
「そうですね、スーツにこだわらず、黒のパンツに上は色物のジャケットを合わせてみ

てはいかがでしょう？　例えばこちらのベージュとか」
「ジャケットの丈は短めの方がいいんじゃない？　脚が長く見えるかもよ」
店員さんと夏菜が、代わる代わる私に服を見立ててくる。
目が回るような勢いで、勧められるがまま何着か購入し、まだ初任給も入っていないくせに散財してしまったのだった。
いや、これは致し方ない出費だ。社会人としての身だしなみ。
これで少しは、一成さんや時東さんに近付けるといいのだけど。

翌日、さっそく購入したパンツにジャケットを羽織り、ようやくリクルートスーツから卒業した私は、ドキドキしながら出勤した。
リクルートスーツの昨日は、「新人が入ってきた」という好奇の目で見られていたことがプレッシャーになっていたけど、これはこれで緊張する。
昨日見立ててもらった、白のVネックブラウスにダークグレーのジャケット。少しは知的に見えるだろうか。
「おはようございます」
「おはよう」
一成さんは私よりも早く出勤し、始業前だというのにもうパソコンに向かって仕事をしている。

私は空調をチェックし、副社長室を簡単に掃除。それが終わると、スケジュールの確認とメールのチェックをするために、パソコンを開いた。
「ずいぶん早いんだな」
「はい、緊張して。遅れたら嫌だなって思ってたら、早く着いてしまいました」
「まだ始業までだいぶ時間がある。ちょっと付き合ってくれ」
「あ、はい」
私は慌てて手帳とペンを抱えるが、一成さんは「なにも持ってこなくていい」と手で制し、スタスタと歩いていく。遅れないようにと小走りでついていくと、チラリとこちらを見て速度を落としてくれた。
後ろをついていくつもりだったのに、横並びになり心臓が跳ねる。
隣に立つ一成さんは、背が高くて今日もスーツがよく似合っていて、大人の魅力がたっぷり。隣に立つのが私なんかで申し訳ない気持ちになってしまう。
だけど、こんなに近くにいられるのも貴重な気がして、ひとときの時間をありがたく思った。
……のも束の間。
「えっ、えっ？」

やってきたのは二階のカフェ。
目の前にはモーニングセット。
目をぱちくりさせている私に、一成さんは淡々と言う。
「コーヒー？　紅茶？」
「あ、コーヒーで……って、いや、あのっ」
困惑する私をよそに、店員さんがコーヒーを運んでくる。
ふわりと湯気が立つカップからはとても良い香りが漂い、鼻をくすぐった。
「すごくいい香り」
「コーヒーは種類で香りが変わる。これはブルーマウンテンでリラックス効果がある」
カップを両手で持ち上げ香りを楽しむ。そのまますうっと深く息を吸うと、温かさが体に入り込んできて浸透していく。確かにリラックス効果がありそうだ。
メニューを見ると、コーヒーだけでなく紅茶や日本茶の説明も書かれていて、気分に合わせて選ぶことができるようになっている。
「やっぱり手帳を持ってくるべきでした。勉強しなきゃ」
きっとそのために連れて来てくれたに違いない。塚本屋の副社長の秘書としてお茶の知識が皆無ではいけない。だから私への教育の一環なのだろう。
なるほど、これも秘書の務めなのかなんて納得しかけたのだが……

「そういう意味で誘ったんじゃない。朝食がまだなんだ、付き合ってくれ」
と言われ、治まっていたドキドキが呼び起こされてしまった。
カフェは朝早くから開いているようで、モーニング目的のお客さんがチラホラと見受けられる。とても落ち着いた色合いの空間は、時間の経過を忘れるほど居心地が良い。さすがお茶の老舗だけあって、緑茶や抹茶、ほうじ茶などを使ったスイーツも充実していた。
「甘味の方が良かったか？」
あまりにもメニューを凝視していたからだろうか、一成さんに気を遣われ慌てて首を横に振る。
「いいえ。実は緊張しすぎて、朝食を抜いてきたんです。いただきます」
「そうか。なら毎日ここで朝食をとろう」
「……えっ？」
「ここで落ち着いてから業務に取り組む方が、効率が上がるだろう」
「あっ、はい、そ、そうですね」
私はそう頷いて、コーヒーカップに視線を落とした。
こんなことをされては心臓がもたない。というか、また私は一成さんを好きになってしまいそうな気がしてならない。だって、働き始めてからまだ二日目の朝だというのに、

もうこんなにもドキドキしているのだから。

そんな落ち着かない気持ちの私とは対照的に、一成さんはクールにコーヒーを飲んでいる。

きっと、一成さんはなんとも思っていないんだろうな。私と違ってぎこちなさだってまったくないし、もしかしたら、昔私が告白したことだって忘れているのかもしれない。自分の元で働かないかとオファーしてくるくらいなのだから、私みたいにいつまでも過去のことを気にしたりはしないのかも。

まったく、自分の心が大騒ぎで忙しい。

もう社会人となったのだから、落ち着いた女性を目指そう。

そう心に決めた瞬間、耳に入ってくる言葉――

「ねえ、あれって副社長じゃない？」

「やだ、本当だぁ。かっこいい！」

「一緒にいるの誰だろう？」

「さあ？　なんか釣り合わないね」

聞こえるか聞こえないかくらいの声の音量とともに、クスクスと笑い声。

居たたまれない気持ちになって、カップに視線を落とす。

一成さんがかっこいいのはわかる。本当に、男らしさと相まって目を惹くような美しさがあるのだから。私も遠巻きで見ているなら「キャー、かっこいい！」だなんて騒いでいるに違いない。

問題は私だ。釣り合わないだなんて、私が一番よくわかっている。自分が平凡すぎることは自覚してるんだから、わざわざ聞こえるボリュームで言わないでほしい。

「――さき、千咲」

「は、はいっ！」

呼ばれていることに気付き、姿勢を正す。

「そろそろ行こうか」

「あ、そうですね。お会計は……？」

「もう済ませてある」

「えっ!?」

一成さんはすっと立ち上がると、スタスタと行ってしまう。

「やばっ！　生副社長、イケメンすぎる！」

「これは眼福だわ！」

慌ててついていくと、先ほどこそこそとこちらを見ながら話をしていた女性たちが、黄色い声を上げているのが耳に入った。

それには激しく同意だ。本当に一成さんったら、たった数年でどれだけかっこ良く

なったら気が済むのだろう。昔からかっこ良かったけど、今はさらに磨きがかかって大人の魅力もパワーアップしている。近くで仕事をする私の身がもたない。

「今日は午後から外出する。わからないことは時東に聞いてくれ。定時になったら帰っていい」

「はい」

「それから……」

一成さんは考え込むように言い淀み、急にこちらに視線を向けた。じっと見つめられ何事かと思わず身構える。

「……あまり首元が開いた服は着るな」

「え？」

「悪い虫がつく」

「虫……？」

「なんでもない。行くぞ」

そんなに首元が開いていただろうか。思わず視線を下に落とすと、ぺちゃんこの胸のせいで、変な隙間ができていた。

これは……情けない。もっと胸が大きくて、谷間でもできているなら見映えがいいものを。

やっぱり私に大人っぽい服は似合わないんだなぁなどと一人落ち込みつつ、デスクへ戻った。

第二章　副社長の婚約者

あれから毎日、一成さんと二階のカフェで朝食をとることが日課になった。

早く来ることは苦ではないし、なにより一成さんとこうしてお茶を飲みながら、たわいもない話ができるのがとても嬉しい。

ただ、支払いにおいては毎回一成さんが払ってくれていて、どうしても譲ってくれない。その点は心苦しいところだ。

仕方がないので、これも業務の一環と思って割りきることにした。

様々な種類のコーヒーや紅茶、そしてたまにお茶漬けなど、いろいろなパターンを試している。改めて、塚本屋のスケールの大きさを思い知ると同時に、自分なりにお茶の知識を深めようと努力しているのだ。

いつだか夏菜が言っていた。

『案外、餌付けされてたりして』

今なら思い切り首を縦に振る。
私、餌付けされている自覚がある。
でもそれが、嫌じゃなくて心地良い。
思わぬ形ではあるが、一成さんの側にいることができるこのご縁に、改めて感謝だ。
「千咲、今日は来客が立て込んでいたはずだから、よろしく頼む」
「はい、わかりました」
一成さんの言うとおり、今日は午前も午後も来客で予定が詰まっている。
お迎えに上がって会議室へご案内し、一成さんに声をかけてお茶を出す。そして合間にメールの確認。とにかく息つく暇もない。そんなときに限って電話対応も多く、目が回る忙しさに頭を抱えたくなった。だけど仕事にも慣れてきたのだろうか。自分なりになんとかこなせている気がする。
一成さんとは朝のカフェで顔を合わせているものの、それ以外の時間帯で一緒に仕事をすることはあまりない。
それもそのはず、一成さんは副社長なので多忙を極めるのだ。一成さんの仕事に対する真剣な表情は、凛々しすぎて眩しすぎて、まさに眼福だ。たまにこっそり眺めている。
私はそんな一成さんをサポートする秘書。足手まといにならないように業務をこなす日々。

ふいにスマホが鳴り、私はパソコンの手を止めて通話ボタンを押した。
「はい、片山で……」
名乗っている途中で、時東さんの緊迫した声が聞こえてくる。
『片山さん？　十五時からのお客様、どこにお連れしたの？』
「えっと、３０５会議室ですけど……」
『そういうことか。あのね、５０３会議室の間違いよ』
「えっ⁉」
慌ててスケジュールを確認するが、そこには３０５会議室と登録されている。併せて会議室予約を確認すれば、そちらは５０３会議室となっていた。
「す、すみませんっ！　登録ミスしちゃったみたいで……あの、すぐ行きます！」
『私が今向かってるからいいわ。あなたは副社長へ連絡しておいて。待ってると思うから』
「は、はいっっっ！」
身体中の血の気が一気に引いていくのがわかる。震える指で一成さんの連絡先を表示させる。ワンコールのあと、すぐに『はい』と低い声が聞こえた。
「片山です。すみません、十五時からのお客様を間違った会議室にお連れしてしまってっ」

『……それで？』
「あ、はい。今、時東さんがそちらにお連れしますので……」
『そうか、わかった』
「あの、本当にすみませんでした」
謝罪の言葉の途中で通話は終了し、耳にはツーツーという無機質な音だけが響いた。
どうしよう。
ミスをしてしまった。
バクンバクンと心臓の音が聞こえるかのように脈打ち、背中には冷たい汗が流れてくる。
お客様を間違った場所に案内したどころか、別の場所で一成さんも放置。しかも時東さんに指摘されるまで気付かないばかりか、時東さんを走らせてしまうなんて。
それに一成さんの冷たい声。あれは完全に怒っていた。
「……うわぁぁ」
私はパソコンを前にして頭を抱える。
もう、この世の終わりであるかのような気持ちになった。

しばらくして戻ってきた時東さんを見るやいなや、すぐさま謝りに行く。土下座する勢いの私に、時東さんはクスッと笑って肩を竦めた。
「まあ、誰にでも失敗はあるわよ。私も一緒に確認しなかったのがいけないし」
「いえ、本当にすみません。ご迷惑をおかけして」
「大事にならなかったからセーフよ。次は確認を怠らないようにね」
時東さんは優しく私の肩をポンポンと叩いた。なんでもないように自席に戻り、そして思い出したかのように「あ！」と声を上げる。
「あー、副社長からは叱られるかもしれないけど、負けないようにね。あれは鬼だから」
「……はい」
叱られるのは当然だ。とんでもないミスをしたのだから。さっきの電話の声だって酷く冷たかった。
そういえば、と私は思い出す。
『秘書になった子を、毎回泣かせてダメにする』
『仕事に厳しいし、視線だけで人を殺しにかかるから』
そう、時東さんに忠告されていた。
それに一成さんも……
『俺の秘書は、俺が嫌になってすぐに辞める』

「うわぁぁっ……」
思い出して、また頭を抱えたくなった。
定時を過ぎ、ようやく執務室へ戻ってきた一成さんを見つけ、私は小走りで駆け寄った。
「副社長、あの、今日はすみませんでした。私……」
「ああ、わかっている」
なにを言われるのか覚悟をして、泣きそうになりながら頭を下げたのに、返ってきたのは一言だけ。そして何事もなかったかのように、一成さんは副社長室へ入っていく。
……あれ？
てっきりその場で叱られることを想定していたのに、あっさりとかわされて拍子抜けしてしまった。私はしばらくその場で呆然と立ち尽くす。
まさか、これはめちゃくちゃ怒ってるってこと!?
そう考えると、戻りかけていた血の気が思い出したかのようにサーッと引いていく。
ううっ……
「……私、もう一度謝ってきます」
涙目になりながら時東さんと目が合うと、御愁傷様といった感じでそっと目を伏せられた。

ノックをしてから副社長室へ入ると、ジャケットを脱いで首元を少し緩めた一成さんが「どうした？」と視線をこちらへ寄越す。
窓からは夕日が差し込み、まるで一成さんから後光が射しているようで神々しい。
いや、今は静かに怒る悪魔のような気がしてならない。一成さんはいつもクールなので、感情が読み取れないのだ。
「あの、今日はご迷惑をおかけして本当にすみませんでした」
「ミスは誰にでもあるだろう」
「……はい」
「別に気にしていないから、千咲もそんなに気にする必要はない」
淡々とした一成さんの声音からは怒りの気配は感じられない。むしろ不思議そうな顔をされ、思わず心の声が漏れた。
「……それだけ、ですか？」
「ん？」
「あ、いや、えっと、副社長は鬼だから叱られるかもしれないって、時東さんが……あっ……」

口走ってから、慌てて両手で口元を押さえる。しまったと思ったときには一成さんの眉間にしわが寄り、はあっとため息を吐かれてしまった。

「千咲は俺に怒られたいの？」

「そういうわけじゃないですけど、ミスをしたのになんか優しいなって思って……」

「優しくされるのは嫌いか？」

「はい？」

いつの間にか一成さんはこちらへ近付いてきていて、あれよあれよという間に一気に距離が縮まる。勢いに圧されて数歩下がると、私の背はトンと壁に触れた。

しゅっと顔の横を一成さんの手が通り過ぎ、背の高い一成さんから見下ろされる形になる。

綺麗な瞳は私を鋭く捉えて、その威圧感だけで身動きが取れない。

そうだ、これはいわゆる壁ドンってやつだ。

そう頭で理解したときだった。

薄く綺麗な唇がゆっくりと開く。

「覚悟しろ」

短く告げる一成さんの口角はほんの少しばかり上がり、見つめるその視線から目が離せなくなった。まるで金縛りにでも遭っているかのように。

そう、目で殺されるとはこんな感覚なのかも。なんて思っているうちに一成さんの顔が近付いてきて、唇に触れる温かな感触。

「スケジュール登録をミスった罰だ」

なにが起きたか理解するのに数秒は要した。

今起こったことを理解するなり、私の頬は真っ赤に染まる。そのままズルズルとその場にへたりこんだ。心臓がドキンドキンと暴れまくって、口から飛び出そうになっている。

キスだよね……

なにか言いたいのに。動揺でなにも言葉が出てこない。

そんな私とは対照的に、一成さんは悪びれることもなく、いつも通り綺麗な顔で微笑んだ。

呆然自失のまま、ふらふらと自席に戻る。

あんなことがあって、まったく思考が働かない。いまだ唇に残る余韻に胸がきゅっとなる。

一成さん、なんであんなことを……

ドキドキが止まらない。キスが罰だなんてやばすぎる。もしかして、過去の秘書たちもみんな、こんなことをされてきたの？

「時東さんの仰っていた意味がわかりました」
「なに？　ついに殺られたの？」
「……やられました」
思い出すだけで顔が赤くなるし頭を抱えたくなる。そんな私を見て、時東さんは優しく背中を撫でてくれる。
「メンタル大丈夫？」
「大丈夫じゃないです。もうどうしていいかわかりません」
「そうやって歴代の秘書を泣かせてきたのよ、あの男は。今度こそガツンと言ってやらなきゃ」
「時東さんも、その、……やられたことあるんですか？」
「しょっちゅう殺りあってるわ。私くらい強くならないと、ここではやっていけないわよ」
「うぇぇ……」
しょっちゅうやりあう？
ど、どんな関係なの？
もしかして一成さんってば、タラシなの？
赤くなっていた顔は、血の気を失うように一気に青ざめていった。

立ち読みサンプル
はここまで

翌日から、まともに顔も見られないだろうと思っていた。なのに、いたって普通の一成さんにいつも通りモーニングをごちそうになり、この自然体を見て、昨日のアレは夢だったのかと思わなくもない。
「あ、あの……」
「なんだ」
綺麗な瞳に射貫かれて、出かかっていた言葉は喉につっかえる。
昨日のキスの意味が知りたい。
知りたいのに、聞くのは怖い。
言い淀んで口を閉ざすと、先に一成さんが口を開いた。
「千咲に頼みたい仕事がある」
「あ、はい」
なんだ仕事か、と思い手帳とペンを準備する。
それなのに一成さんから出てきた言葉は、思いもよらないものだった。
「俺の婚約者になってほしい」
「……はっ……いっ？」
意味がわからずとも、動揺しすぎてペンを落としそうになった。「それで」と続ける一成さんは、実に淡々としていて冷静そのものだ。動揺しているのは私だけ。